

- 註7 渡辺俊夫『常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書4 砂川遺跡』 茨城県教育財団 1982年
- 註8 中村光一他『塙東遺跡』 茨城高等学校史学部 1978年
- 註9 川崎純徳「君ヶ台貝塚」 『勝田市史 考古資料編』 1979年
- 註10 福島県袋原遺跡例などが代表的なものと思われる。
- 註11 草間俊一他『岩手県盛岡市繫遺跡』 盛岡市公民館 1960年
- 註12 丹羽茂他「菅生田遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告VII』 宮城県教育委員会 1982年
- 註13 永峯光一他『平出』 朝日新聞社 1955年
- 註14 土井永好他『橋本遺跡——昭和55年度調査概要——』 相模原市橋本遺跡調査会 1981年
- 註15 八幡一郎「縄文土器・土偶」 『陶器全集』29 平凡社 1965年
- 註16 中西充他『神谷原II』 八王子市櫛田遺跡調査会 1982年
- 註17 折原洋一他『東京都町田市武蔵岡遺跡——1979年度調査——』 武蔵岡遺跡調査会 1980年
- 註18 最近、山梨県勝沼町宮の上遺跡で、中期初頭の器台形土器の出土があった由情報を得ているが、未報告のためにこれ以上はふれないで置く。
- 註19 田川良『桜谷津』 桜谷津遺跡発掘調査団 1977年

(5) 台付土器について

当遺跡からは台部を有する土器が6区で18点、7区で4点出土している。当遺跡から出土した例はいずれも台部だけかまたはその接合部の破片で、器形をうかがえるようなものは出土していない。

台付土器は、縄文時代前期にも散発的な出土例がみられるが、本格的に盛行するのは中期からと考えられる。中期も初頭から前半に属する出土例は少なく、中葉以後、後半にかけて盛行するものである。関東・中部・北陸・東北地方など広い分布域を示しているが、未だ縄文中期の台付土器については本格的に研究された例は少ない。藤森栄一氏が『井戸尻』の報告書中で、「新道期に確立し、井戸尻期で最も発達した」とし、用途は「特殊な供献具」であろうとした以外には、山崎和巳氏の形態分類と若干の集成をあげうただけである。⁽¹⁾この中で山崎氏は、台付土器を2形式に分類した。胴中部付近で膨らみ、そこに最大径があり球状を呈する(A形式)、口縁部付近に最大径を有し、胴部は膨らみをみずにやや直線的に窄まる⁽²⁾(B形式)の2形式で、A形式を8例、B形式を4例集成している。A形式は長野県4例・東京都3例・埼玉県1例で、B形式はいずれも長野県の例となっている。12例の時期を調べて、山崎氏は台付土器は、新道式期から曾利V式期まで存続すると指摘している。

筆者も、手元の若干の文献によって台付土器の集成を行ってみたところ、西は九州熊本県黒橋

貝塚出土例・三重県東庄内B遺跡出土例⁽³⁾・岐阜県門端遺跡出土例⁽⁴⁾などがあり、東は東北青森県三内遺跡出土例⁽³⁾をはじめ、宮城・福島などにも分布が認められ、汎日本的な分布を示していることが判明した。その中で、東北の中期終末の例は波状縁を呈する台付鉢形を呈すること、その他の地方および中期の前半～後半にかけての資料はほぼ平縁の台付鉢形を呈するものが多いことも知り得た。また、形態（形式）にも各種のものが存在することも分かり、山崎氏のA・B形式だけでは律し切れないことは確かである。しかし、筆者には全国的に分布する本種土器について集成し、検討する資料がないので、主として関東・中部地方を中心に若干気づいた点を指摘しておきたい。

まず、形態についてみると、カップ形・トロフィー形と称される例もあるように、A・B形式以外に、A形式に近いが、口縁部が最大径となり胴部が球状を呈さないもの（三重県東庄内B遺跡例他⁽⁵⁾）、台部が高く、直線的に外方へ開き浅鉢形をなすもの（新潟県森上遺跡他⁽⁵⁾）、台部が低く、内湾しながら開き碗状を呈するもの（新潟県清水上遺跡他）など各種あり、今後に明確な形態分類がなされることが期待される。口縁は平縁の例が目立つが、把手や突起を飾る例も多い。台部にも低いものや高いもの、有孔のものと無孔のもの、台部が直立気味のものと外方へ開くものなどの違いがみられ、形態分類の上で有効な視点と考えられる。また、台部は無文のものが多いが、縄文・捺糸文が施された例もみられる。

分布については、関東・中部・北陸・東南北部地方を中心に分布するが、その中でも特に、中部地方の長野県・山梨県および北陸の富山県・新潟県などに比較的多く出土している。群馬県では今後報告例が増加するようである。

時期については、前期の例や中期初頭の例は少なく、中期前半の例として、新道遺跡1号住居跡例⁽⁶⁾・西上遺跡例⁽⁷⁾の他に東京郡恋ヶ窪遺跡出土例⁽²⁾・千葉県和名ヶ谷通源寺遺跡出土例⁽⁸⁾などがみられやや増加してくる。中葉に入ると漸増し、中葉後半の加曾利EⅠ～Ⅲ式期、曾利Ⅰ～Ⅲ式期、上山田式～古府式期に盛行するようである。しかし、全体の中での出土量はきわめて少なく特殊な土器であることは否定できない。終末期の様相については明らかではないが、徐々に減少しつつも後期まで存続し、後期中葉以降に発達する台付鉢形土器へと続くものと考えられる。しかし、この間をつなぐ資料は乏しく今は可能性を考えるだけにしておく。

関東地方における台付土器については破片の出土例は多いが、完形の個体はまれである。当遺跡とほぼ同時期の加曾利EⅢ式期の例は非常に少ない。

最後に、関東地方出土のほぼ完形の台付土器出土遺跡地名表を掲げる。

- 1 坂東山遺跡⁽⁹⁾（埼玉県入間市）
- 2 通源寺遺跡（千葉県松戸市）

- 3 西上遺跡（東京都昭島市）
- 4 三鷹五中遺跡（東京都三鷹市）
- 5 恋ヶ窪遺跡（東京都国分寺市）
- 6 浅香内 9 H 遺跡⁽¹⁰⁾（栃木県黒羽町）
- 7 弁天池遺跡⁽¹¹⁾（栃木県芳賀町）
- 8 橋本遺跡⁽¹²⁾（神奈川県相模原市）
- 9 南三島遺跡 1・2 区⁽¹³⁾（茨城県竜ヶ崎市）

註 1 埼玉県鷲巣貝塚・千葉県幸田貝塚出土例は関山式期、長野県荒神山遺跡出土例は十三菩提式期のものである。『縄文土器大成』 1 による。

註 2 山崎和巳「台付土器について」 『恋ヶ窪遺跡調査報告Ⅲ』 国分寺市教育委員会 1982年

註 3 永峯光一他『縄文土器大成』 2 講談社 1981年

註 4 大野政雄『門端縄文遺跡発掘調査報告書』 清見村教育委員会 1983年

註 5 甘粕健他『新潟県史 資料編 1 原始古代 1 考古編』 新潟県 1983年

註 6 松沢亜生「長野県諏訪郡新道の中期縄文土器」 『考古学手帖』 1 1958年

註 7 和田哲『西上遺跡』 昭島市教育委員会 1975年

註 8 塚田光他「千葉県通源寺貝塚採集の中期縄文土器」 『考古学雑誌』 第59巻第 1 号 1973年

註 9 宮崎朝雄他『坂東山』 埼玉県教育委員会 1973年

註10 栃木県立博物館『はなひらく縄文文化』 1984年

註11 日本考古学協会『北関東を中心とする縄文中期の諸問題《資料》』 1981年

註12 大貫英明『橋本遺跡Ⅲ』 相模原市橋本遺跡調査会 1983年

註13 人見暁朗『竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書10 南三島遺跡 1・2 区（下）』 茨城県教育財団 1984年 第75号住居跡（第244図 8）は好例である。

2 土製品について

(1) 土器片錘について

土製品の中で量的に最も多く出土したものが、土器片を利用した土錘、すなわち土器片錘である。^(1a, b) ^(1c) 土錘の形態分類については、渡辺誠、柳澤清一氏らの先駆的業績があり、土器片錘に関しては長軸の両端に紐かけ用のキザミ目を付すもの、短軸の両端に紐かけ用のキザミ目を付すもの、長短両軸に計 4 か所の紐かけ用のキザミ目を付すものの 3 種に大別されている。当遺跡から出土した540点のうち、完形のものは309点であり、そのほとんどが、長軸両端に紐かけ用のキザミ目をもつものである。長短両軸に計 4 か所の紐かけをもつものはなかった。特異なものとして、キ